
世田谷区立郷土資料館

資料館だより

No.67

2017.10

平成 29 年度特別展

地図でみる世田谷

－ 会期 平成 29 年 10 月 28 日（土）～ 12 月 3 日（日）－



大東京表現地図〈部分〉(昭和7年)

江戸時代の世田谷地域は純然たる農村地帯であり、丘陵地帯には雑木林と畑地が広がっていました。畑地では雑穀や蔬菜類が栽培され、江戸に住む人々に供給されてきました。蔬菜類の栽培には大量の肥料が必要なため、農家は江戸市中の市場へ野菜を運び、その帰りには肥料となる下肥を持ち帰ったのです。この関係は明治に入っても変わらず、世田谷地域は都市近郊農村の姿を留めていました。

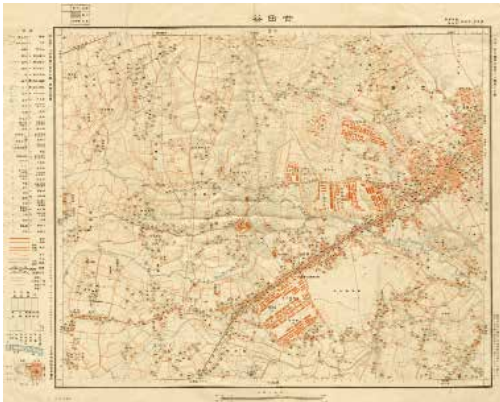
近代国家が成立し政治・経済が東京に一極集中すると、東京の膨張が始まります。この膨張は郊外へ広がり、世田谷地域も都市化の波に飲み込まれることになります。明治中期以降、市中にあって手狭になった軍事施設や学校が広い敷地を求めて移転してきました。そして、関東大震災や鉄道の敷設・第二次世界大戦を契機として、人々が郊外へ移り住むようになったのです。人口が増えると蔬菜類の需要も増えることになりましたが、次第に世田谷地域は宅地造成のために農地が減少しました。そして、蔬菜類の供給はさらに郊外へと移ることになり、世田谷地域は農村から住宅地へと変貌していきました。

本展覧会は、このような変化を明治から昭和 20 年代までの地図によって捉え直そうとする企画です。これらの地図により、世田谷地域の移り変わりを概観していただけることと思います。

〈1 万分 1 地形図 世田谷〉



1



2



3



4

ここに並べた 4 枚は、年代の異なる同一地域の東京近傍 1 万分 1 地形図である。図幅名は「世田ヶ谷」とあるが、図域は渋谷町・代々幡村・目黒村・松沢村・世田ヶ谷村・駒沢村にまたがっている。並べてみると明治末から昭和初期にかけての、交通の敷設や学校など諸施設の設置、農村から住宅地へ変貌する世田谷地域の様子がよく理解できる。

1 図は、明治 42 年（1909）の正式測図による地形図である（翌年発行）。黒と薄藍の 2 色刷で、河川や用水は薄藍で描かれている。明治 20 年代以降、軍事施設の郊外移転が行われ、駒沢練兵場・砲兵旅団司令部・近衛砲兵営ほか多くの軍事施設が出現した。

2 図は 1 図の第 1 回修正図で、大正 5 年（1916）測図された。翌年発行され、3 色刷になっている。世田谷村にはまだまだ宅地は少ないが、現在の世田谷通り沿いや軍事施設の近くに住宅が増加している。

3 図は大正 10 年（1921）の第 2 回修正測図で、大正 14 年に部分修正され翌年発行された。大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災による世田谷地域の被害は軽微であったため、交通網の発達とあいまって人々の郊外移転が進むこととなる。池尻・三軒茶屋・太子堂・駒沢周辺に住宅が増加、池尻には多数の製造所も出現し、学校施設も増えた。

4 図は 3 回目の修正測図で、昭和 3 年（1928）の空中写真測量により作図され、昭和 5 年に発行された。黒と赤の 2 色刷であるが、旧所有者が黄色と紫の線で耕地整理地区を囲み、黒で計画道路等も書き込んでいる。小田原急行電鉄は昭和 2 年に開通している。和田堀浄水場の貯水池は方形が大正 13 年、円筒形が昭和 6 年に完成している。

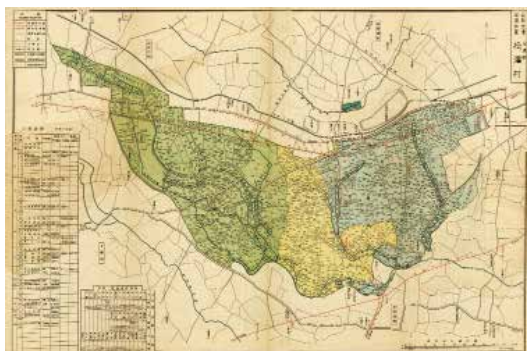
上から

- 1 東京近傍 18 号 世田ヶ谷（明治 43 年）
- 2 東京近傍 18 号 世田谷（大正 6 年）
- 3 東京近傍 18 号 世田谷（大正 15 年）
- 4 東京近傍 19 号 世田谷（昭和 5 年）

〈世田谷区域町村図〉



東京府荏原郡世田谷町(大正 14 年)



最新交通指導地図 荏原郡松沢村(昭和 3 年)



東京府荏原郡駒沢村(大正 14 年)



大東京市郡併合紀念 玉川村(昭和 7 年)



東京府北多摩郡砧村全図(昭和 7 年)



東京府北多摩郡千歳村全図(昭和 6 年)

明治 22 年(1889)の市制町村制施行によって東京市が成立し、東京府下郡部の町村が再編された。世田谷区にあたる地域のうち東部の 4 ヶ村(世田ヶ谷村・駒沢村・松沢村・玉川村)は荏原郡に、西部の 2 ヶ村(砧村・千歳村)は神奈川県北多摩郡に属した。同 26 年に神奈川県に属していた北・西・南の三多摩郡が東京府に移管され、砧・千歳の両村も東京府になった。昭和 7 年(1932)東京市の区域が拡張され、世田谷町・駒沢町・松沢村・玉川村の 2 町 2 村で「世田谷区」が誕生し東京市に属した。さらに、同 11 年 10 月には北多摩郡の千歳・砧村の 2 ヶ村が世田谷区に編入され、現在の大きさとなった。ここで紹介するのは、昭和 7 年の市域拡張以前に発行された町村地図である。

〈幻のオリンピックの、幻のオリンピック村〉



オリンピック村位置図(昭和11～13年頃か)



貼り紙の下に描かれているオリンピック村計画図

放送協会研究所の南側が入口となり、祐天寺線に接している。宿舍棟、練習用トラック、室内練習場らしき建物も確認できる。細道7号の右側は庭園であろうか。

皇紀2,600年記念事業として、昭和15年(1940)開催の第12回オリンピック東京大会が招致され、11年に東京開催をIOCが決定した。大会開催に向けて、世田谷区内では駒沢、砧、用賀、等々力などが競技場、選手村の候補地となった。

本図には、主競技場候補地の駒沢ゴルフリンク、馬術競技会場の可能性があった帝国競馬協会敷地(現馬事公苑)、選手村候補地であった砧村などが記されている。また、成城学園前駅から南東の駒沢ゴルフリンクを通過し祐天寺に至る鉄道計画を、東横認可出願線として点線で示している。大会での鉄道輸送力増強のため、東横、玉川電車の増備増結とともに、この新線祐天寺線敷設、渋谷-祐天寺間の高速鉄道の直通連絡が計画されていた。

図域左側、青・赤で囲われた砧台区画整理予定地区の南端にオリンピック村と表記されている。その北、白紙が貼られた一画が、選手村の計画地であった。下には計画図が描かれていたが、紙を貼って消している。昭和13年5月に東京市は、総合運動場、オリンピック村をともに駒沢ゴルフ場に建設することを決定した。これにより砧村の計画はなくなった。

長期化する日中戦争、それによる各種統制は大会開催を困難にした。同年7月、東京大会組織委員会は、第12回オリンピック東京大会の返上を決定している。

〈戦時改描後の世田谷区詳細図〉



大東京区分図三十五区之内 世田谷区詳細図（昭和17年）

【駒沢練兵場他の改描例】



駒沢練兵場、野戦重砲兵第八聯隊などの軍事施設の註記が消されている。

戦時下、軍事的理由から地図が書き換えられ、重要施設が偽装・抹消されたことを、一般に戦時改描と呼ぶ。戦時改描は、陸地測量部により行われたものがよく知られるが、上図のように、発行者が陸地測量部以外の民間地図にも見られた。

昭和12年（1937）6月、一般向けに販売する地形図について、「国土防衛上秘密保持を要する土地・建物」を改描するよう、参謀総長命令が出された。これが戦時改描の始まりとされる。参謀総長命令によると、改描の対象は①皇室関係（宮城・御所など）、②軍部関係（軍の施設など）、③地方関係（鉄道・水道施設・発電所など）の三つに分類されており、分類ごとに対象となる事物と描画要領が記されている。たとえば離宮・御所については、註記を省略し、敷地内部を周囲の状況に応じて森林や公園などに書き換えることとされている。

〈戦災図〉



戦災地域図（昭和25年）

本図では、戦災焼失地と建物疎開地が赤で示されている。昭和19年（1944）11月から本格的な空襲が始まり、翌年8月の敗戦まで90回以上も攻撃された。被害は軍事施設や軍需工場だけでなく、昭和20年になると焼夷弾による無差別爆撃が増え、東京は焼け野原となった。

世田谷区の被害状況は、死者111名・行方不明2名・重傷160名・軽傷546名・家屋全焼11,409戸・半焼198戸・全潰14戸・半潰59戸・罹災世帯12,235・罹災者46,235名となっている。世田谷区空襲は少なくとも11回を数え、なかでも5月24日・25日の空襲は最大のものとなった。特に25日は山の手一帯が焼夷弾攻撃を受け、区内では軍事施設の集中する太子堂・三宿周辺が大規模に爆撃された。24日の被害は死者13名・重傷33名・全焼187戸・半焼22戸・罹災者885名、25日は死者57名・重軽傷618名・全焼10,531戸・半焼151戸・罹災者42,328名と惨烈を極めた。



東京都区分図 世田谷区（昭和24年）



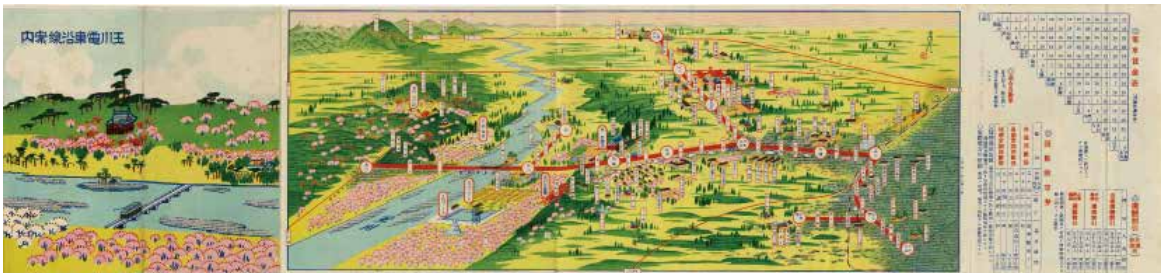
東京都区分図 世田谷区〈部分〉（昭和24年）

5月24日・25日の空襲により、区域北東の代田周辺も大きな被害を受け、世田谷中原駅は全焼した。同駅は翌年6月まで営業を休止する。この時、井ノ頭線永福町電車基地も、ほぼ全ての車両を失う壊滅的な被害を受けている。この急場をしのぐため、陸軍工兵隊により小田急線と井ノ頭線を直結する工事が行われた。この代田連絡線は戦後、昭和26年頃まで使用され、後に撤去されている。

〈沿線案内図〉



小田原急行鉄道沿線名所図絵（昭和2年）吉田初三郎画



玉川電車沿線案内（昭和2年10月～昭和4年5月）金子常光画



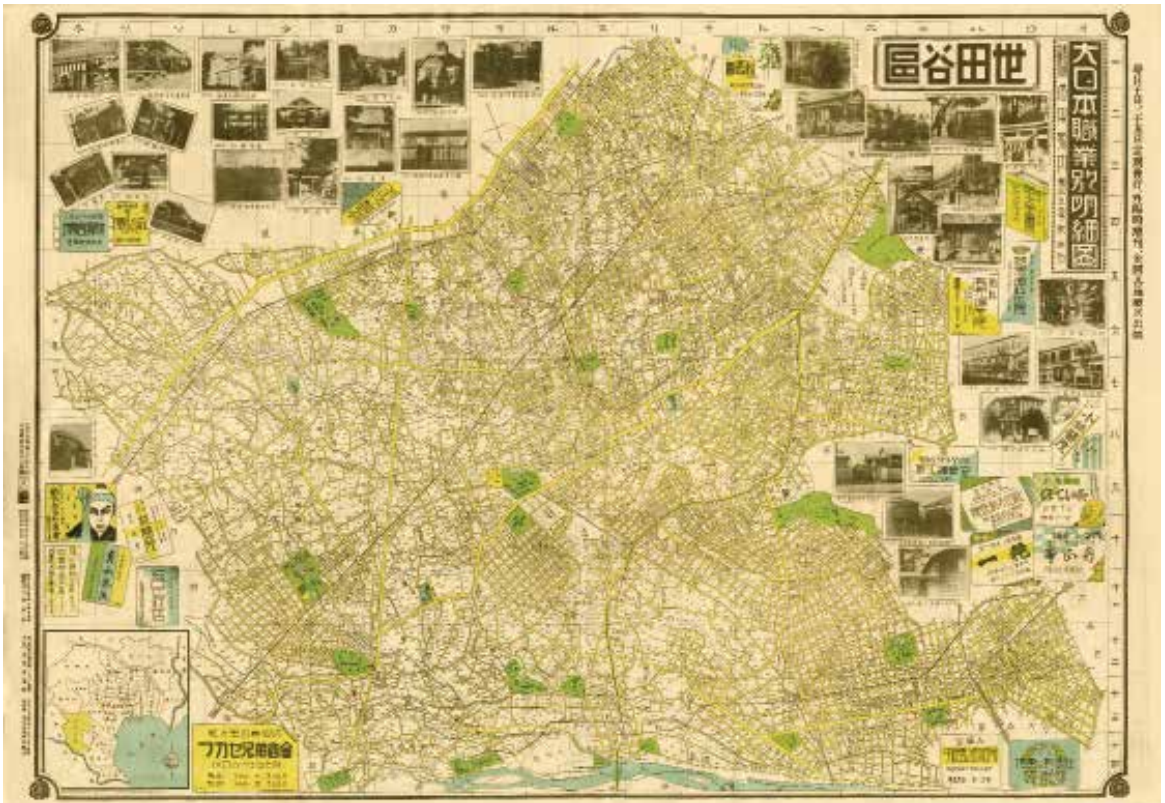
京王電車沿線名所図絵（昭和3年）吉田初三郎画



目黒蒲田東京横浜電鉄 沿線名所案内鳥瞰図（大正15年）吉田初三郎画

大正から昭和初期にかけて、鉄道網の整備や乗合自動車が普及し、全国各地の名所、観光地への移動が容易になっていった。また電鉄各社も沿線に遊園地や各種の行楽地、宿泊施設等を設置し、積極的に観光客を誘致した。こうして小旅行や郊外への行楽がブームとなっていく。それに伴い、多くの案内図が発行された。ここに紹介する観光案内、沿線案内の多くが鳥瞰図となっており、最も有名なのは吉田初三郎による鳥瞰図である。初三郎の技法と、その弟子で後に独立する金子常光が描いた図を較べてみるのも面白い。

〈商工地図〉



大日本職業別明細図 索引附住所入信用案内第 353 号 東京市 世田谷区 (昭和 12 年)

個別の商店や企業、工場などの所在と名称を記載した案内図を「商工地図」と呼ぶ。明治末頃から戦前にかけて複数の出版社から発行された。「商工地図」という呼称も、この頃の都市案内図類を指して使われることが多い。その中でも日本交通社による『大日本職業別明細図』がよく知られる。このシリーズは大正から昭和にかけて毎月 2 回定期刊行されたもので、日本全国の都市を網羅し、当時の満州、台湾、朝鮮等の都市もその範囲としていた。世田谷区の案内図は『大日本職業別明細図』シリーズの第 311 号、438 号、353 号にあたり、いずれも表側に地図と商店、学校、社寺などの写真や広告を収め、裏面は区のご案内記と職業別索引となっている。地図は、店舗などを表示しながら紙面に収めるために、かなりデフォルメされている。縮尺は記されておらず方位のみが示されているが、位置によってはそれも正確ではない。このように地図としての精度を欠いてはいるが、地形図等からは得られない多くの貴重な情報を、これらの商工図から知ることができる。本図は千歳・砧編入後の商工図である。ただし、左下の大東京区分図の世田谷区には両村は加わっていない。2ヶ村が増えた世田谷区は、押しつぶされたような形で図幅に収まっている。周囲の写真と広告も大幅に増えている。旧千歳村域では、烏山寺町の 17 寺院、久野トマト工場、ウテナ化粧品工場、旧砧村域では、成城学園、放送研究所、喜多見御料林、砧上下浄水場、わかもと東京工場などが表示されている。

資料館だより	No.67
発行年月日	平成 29 年 10 月 28 日
編集発行	世田谷区立郷土資料館 〒 154-0017 世田谷区世田谷 1-29-18 ☎ 03-3429-4237 FAX 03-3429-4925 広報印刷物登録番号 No.1557